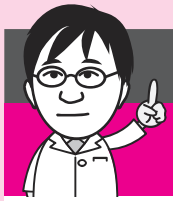


教授の『職場の健康づくり研究室』

第129回 冬のにおいの思い出

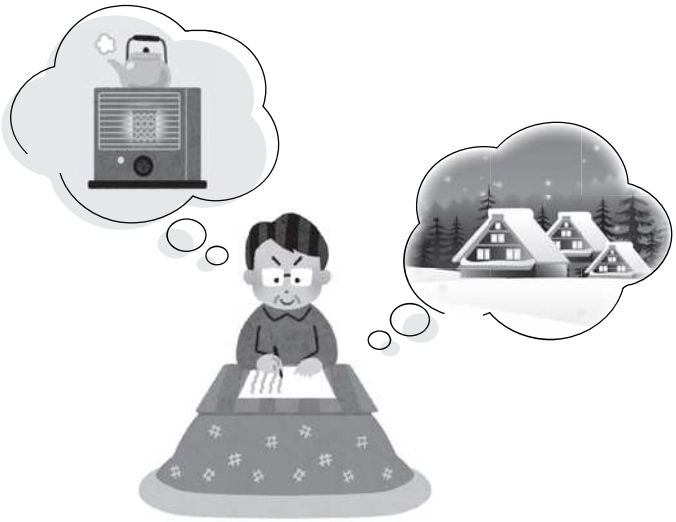
寒い日が続いている。コロナもインフルエンザも大盛況で、病院の外来に出れば、いずれかの患者を診ることが多い。ワクチンだけでは完全に防ぐことはできず、やはりマスク、三密を避ける、手洗いの励行、がどれだけ有効であったかがわかる。私ももう還暦を過ぎて、子どもたちもひとり立ちして、家内と二人で迎える正月に思うのは、自分が子どものころにはあった冬のにおいが希薄になったということである。

▼冬のにおい

冬のにおいとは、生活の中で感じるさまざまなにおいのことだ。私は鳥取の郊外の兼業農家で生まれ育った。居間に掘りごたつがあり、冬は毎朝こたつのやぐらを上げて、ばあちゃんの準備した練炭（れんたん）を七輪に入れて、やぐらをおろして暖をとる。しっかりした温みと練炭のくすぶる炭のにおいがする。祖父が煙草盆をだしてキセルを吸う煙草のにおい、台所からは煮炊きする醤油やご飯や漬物のにおい、廊下に出れば仏間から ただよう線香の香り、自分の部屋に戻れば石油ストーブの鼻をつく灯油のにおい。そして、雪の積もった外に出れば、かすかな雪のにおいと草を燃やす焼きごえのにおい。思えばおびただしいほどのにおいに囲まれていた。それに比べて今はどうだろうか。いま暮らしている家はいわゆる電化住宅である。屋内で火を使うことはできない。台所からただよう料理のにおいはあるが、24時間換気なので屋内にはこもらない。私は煙草を吸わないので、煙草のにおいもない。においを排除する家で暮らすようになって、逆ににおいには敏感になってくる。仏壇に供える線香は無臭のものだが、それでもこげるような独特の香りが気になる。コーヒーやお茶の香りにも敏感になった。

私の家内は都市部で育ったので、鳥取の実家に里帰りしたときには、草を燃やすにおいがとても苦手だった。だが私にとって、草が焼けくすぶるにおいは、小さい頃の田んぼにまつわる懐かしい思い出でもある。においは記憶と深く結びついている。

電化住宅というのは断熱効率を上げるため密閉度が高い。母が存命中にはときどき鳥取の実家に帰っていたが、冬場の実家の中はおそろしく寒かった。空間が広くて風通しのよい古い家は、冬場は本当に寒い。でも、そういう作りの家だからこそ、さまざまなにおいを経験できたともいえる。いまのように密閉度の高い屋内に暮らしていると、生活現場から自然が失われ、冬にまつわる暮らしのにおいが感じられないのだ。電気ストーブで暖をとりつつ自宅で原稿を書きながら、子どもの頃の冬の暮らしにまつわるにおいの数々を、懐かしく思い出すのである。



鳥取大学医学部
地域医療学講座
教授
谷口　晋一
（たにぐち　しんいち）